

翼賛選挙無効判決を勝ち取った

大衆政治家・富吉栄二伝

宮下 正昭

はじめに

泥沼化した日中戦争を遂行しながら、アメリカ、イギリスなどとの太平洋戦争にまで突入した東條英機内閣は 1942（昭和 17）年 4 月、第 21 回衆議院選挙を、いわゆる翼賛選挙として敢行する。2つの戦争を推し進めるには国民の代表である代議士も四の五の言わず、政府と一体となる必要がある。そのために政府肝いりの翼賛政治体制協議会が推薦した候補者を物心両面で支援して当選させるという手段をとったのだった。議会の機能を止めて政府が独断専行するという手段はとらなかった、あるいはとれなかったという点においては、日本社会が成熟していたとみていいかもしれないが、立候補者の人物評価を含め、かなり乱暴な選挙だった。

推薦を受けられなかった立候補者は「自由候補」として選挙戦を展開する。新聞、ラジオから無視されるなど、さまざまなハンディを背負った。警察を含めた行政の圧力や妨害も受けた。特に保守的な風土とされた鹿児島県はひどかったようで、選挙後、選挙無効の訴えは全国で 6 選挙区から起こされるが、鹿児島県は 3 選挙区すべての区から提訴された。6 つ訴訟を受けた大審院¹のうち鹿児島第 2 選挙区を担当した第 3 民事部は積極的な訴訟指揮を執り、唯一、選挙の無効を認め、やり直し選挙となる。選挙無効の判決確定は戦後の現在まで、この判決が唯一無二だ。東條内閣の圧力にもめげず、気骨の判決を下した吉田久裁判長については、NHK がドラマ化し²、書籍化³もされている。しかし、提訴した原告側にはこれまであまり関心は向けられていない。

訴えを起こしたのは、鹿児島第 2 選挙区で敗れた富吉栄二（とみよし・えいじ）ら 4 人だった。富吉は鹿児島県で唯一と言っていい大規模な小作争議・農民運動を先導した人気代議士で、3 期目も当選確実とみられていたが、県を挙げたさまざまな妨害を受ける。富吉はその妨害の実態を事細かく調べ、具体的な妨害内容、その日時、人名まで添えて提訴。鹿児島で行われた大規模な証人尋問も裏から支えた。



富吉栄二

身長 150 センチ足らずと短軀ながら、親分肌で気っぷのいい、ユーモラスな弁舌で、県民の人気も集めた富吉。翼賛選挙で敗れたが、その直前までは社会大衆党（戦後の日本社会党源流の一つ）のメンバーで、挙国一致、翼賛体制を

¹ 戦前の選挙無効の訴えは 1 審制だった。

² NHK スペシャル 終戦ドラマ「気骨の判決」（2009 年 8 月 16 日放送）

³ 清永聡『気骨の判決』（新潮社、2008）

目指した第一次近衛文磨内閣を強く支持していたという皮肉な巡り合わせももつ。そんな富吉については、これまで地元紙『南日本新聞』などで単発的に紹介されてきたが、まとまったものはない。わずかな1次資料と遺族らへの取材を元に、「東條に勝った男」富吉の半生を小伝にまとめる。

1 洞爺丸遭難死 愛された波乱の人生

「うんにゃ！ ちょっしもた！」⁴。富吉栄二はそうつぶやいたかもしれない。青函連絡船・洞爺丸の1等船室。ワイシャツの上に救命胴衣を着つけてまもなくだったろう。船は大きく傾き、同時に海水が浸入してきた。身長150センチ足らずと小さな身体だったが、体力はあった。負けず嫌いだった。ほぼ天地が逆さまになったなか、富吉はなんとか脱出を試みたはずだ。しかし、海水はまもなく室内を満たした⁵。

富吉は、鹿児島県霧島市国分の比較的裕福な育ちだったが、大正末期から昭和初期、小作農支援の農民運動に精出し、鹿児島県初の革新系代議士となる。太平洋戦争中の翼賛選挙では県を挙げた妨害を受けて落選。「こげな馬鹿な選挙はあるか！」とその違法ぶりを裁判で訴え、「選挙無効」の画期的な大審院判決を勝ち取る。県選出で戦後初の国務大臣（芦田均内閣）も務め、衆議院議員6期目の55歳だった。何度も逆境を乗り越えてきた波乱の人生だった。

1954（昭和29）年9月。右派社会党の顧問だった富吉は河上丈太郎委員長、浅沼稻次郎書記長ら8人で党勢拡大のため北海道に遊説に出る。演説に富吉はもってこいの人物だった。鹿児島弁なまりで、世の不合理的を庶民目線で皮肉交じりに、ユーモラスに語り、聴衆を魅了する。「あれは話術ではない。魔術だ」と作家・海音寺潮五郎に言わしめたほどだ⁶。

富吉の長男・遼（はるか 1929年11月生）によると、農民運動に没入する前、数年間、国分で数学の教師をしていたが、英語も独学で身に付けた。「今、何時け？は、ホッ

⁴ 「いや！ちょっと失敗した！」の意の鹿児島弁

⁵ 『南日本新聞』1954年10月7日付によると、富吉の遺体は海中の1等船室内でズボン、ワイシャツの上に救命胴衣姿で発見された。腕時計は「10時55分」で止まっていた。「あわてて救命胴衣をつけ逃出そうとして果たさなかったものらしく」と同記事。国交省海難審判所「日本の重大海難 汽船洞爺丸遭難事件」によると、船長が事務長に対し、旅客に救命胴衣着用を命じたのが午後10時15分頃。同10時26分頃には船体が45度余り傾斜し、同10時45分頃、約135度傾斜して沈没。浅瀬だったため船底は海上に見えていた (https://www.mlit.go.jp/jmat/monoshiri/judai/20s/20s_toya.htm 2022年2月14日)

⁶ 『南日本新聞』1947年4月27日付、第23回衆議院選挙当選者の紹介で

タイモ イジンナ⁷ (what time is it now?) っち、覚えちよけっ」と教えていたらしい⁸。なかなか頓知の効いた語感の持ち主だったようだ。



写真1 前列左が富吉。後列左端が菊川

北海道遊説は54年9月18日から始まり、富吉は河上らとともに女満別、北見、網走、釧路、帯広と回った。写真1は、函館のホテル庭で撮ったものらしい。姪の小笠原京子(1931年2月生)⁹が持っていた。26日、党労働部長だった菊川忠雄と一緒に洞爺丸に乗船して、難に遭った。乗員乗客1314人中、死亡・不明が1155人という大惨事。室内に閉じ込められていた富吉が収容されたのは10月6日だった。

富吉と菊川の葬儀はまず10月18日、東京・青山斎場で社会党が執り行った。党顧問・西尾末広が富吉をしのぶ。「瘦身短軀容姿必ずしも上るとは言えなかったが、全身に満ちた闘志を柔らかくユーモアで包んで所謂外柔内剛、一種独特の風格を感じしめた」「真に円熟した大衆政治家だった」¹⁰

2日後の20日、鹿児島市の西本願寺でも告別式が行われた後、富吉のお骨は列車で国分へ。富吉の長男・遼によると、途中の各駅ホームには焼香台が設けられ、沿線の住民が弔ったという¹¹。そして、故郷の国分駅。駅前の広場には多くの市民が集まっていたようだ。「カライモカゴを背負った農婦、牛をひいたまま顔をたれている農夫などの姿が目だった。静々とゆくヒツギ。オトナも子どもも男も女も泣いている」と『南日本新聞』(1954年10月21日付)は報じた。

地元での葬儀は国分実業高校(現・国分中央高校)の校庭で翌21日、盛大に行われた。河上や西尾らは鹿児島市の式だけでなく、国分にも参集した¹²。「後片付けが大変でした」と長女の陽子。「花輪が300はありました」。自宅の田んぼで富吉の父親・次郎左衛門と2人で10日間ほどかけて焼却したという¹³。

「西郷隆盛を除いては、富吉ほど県民の人気を集めた人は歴史上いなかったのではないかと」と元・社民党県連副幹事長、松永昭敏氏は評している¹⁴。しかし、今や忘れられた存

⁷ 「掘り出した芋を乱暴に扱うな」の意の鹿児島弁

⁸ 2005年6月29日、富吉遼の自宅(霧島市隼人町)で取材

⁹ 富吉の末妹・ミヤの長女。霧島市国分、富吉の実家に住む。2016年8月26日、その小笠原の自宅で取材

¹⁰ 浅沼稻次郎編『故富吉榮二 菊川忠雄両君党葬追悼録』(日本社会党本部、1954) p8

¹¹ 2016年8月4日、富吉遼の自宅(霧島市隼人町)で取材

¹² 『南日本新聞』(1954年10月22日付)

¹³ 2005年8月4日、富吉陽子の自宅(霧島市国分)で取材。2020年2月、93歳で死亡。

¹⁴ 芳即正・松永昭敏著『権力に抗った薩摩人②』(南方新社、2010) p108

在となった大衆政治家・富吉。几帳面な性格でもあった富吉は手記などたくさん残していたらしいが、「いろんな人がやってきて持っていった」と陽子は残念がっていた¹⁵。

「一言で言って、こじっくいの子の生った魂の入った信念の人だった」と、富吉に勧められて戦後、社会党入りし、代議士を5期務めた新盛辰雄（1926年11月生）¹⁶。「希代の小男で四尺七寸。満身これ闘志」「ユーモラスで敵を作らず、誠実でケレンがなく、金銭に潔白で派閥的傾向もない」と『戦後人物論』（八雲出版、1948 p184）で記した荒垣秀雄。

「学歴充分とは言えないが甚だ文才にたけておられ和歌をよく詠み」「むづかしいイデオロギーの話でも実に判り易く大衆に呑みこませることが出来た」「生来なかなかの気短か者で青年時代は暴れん坊であった」¹⁷富吉。まずは生家からたどってみよう。

2 農民運動家 「伯爵、男爵より肥のしゃく」

富吉栄二は1899（明治32）年7月6日、始良郡清水村（現・霧島市国分）郡田の中農の農家で次男として生まれる¹⁸。父・次郎左衛門は婿養子で母・ミツは気丈夫な女性。若いころから三味線が得意な芸の人だったらしい。

郡山尋常小学校から清水小の高等科に進学するが、長女・陽子によると、このころリューマチに襲われる。「3年ほどだったか入院したと聞いています。その影響で身長が伸びなかったようです。いつも節々を痛がってました」¹⁹。身長が150センチに届かないままだったのは、若年性関節リューマチによる成長障害だったのかもしれない²⁰。



富吉の生家（霧島市国分）

長男・遼によると、成績の良かった富吉は加治木中学校（旧制）に行きたかったらしい。父親が「カネがかかる」と反対し、地元にあった私立の精華学校（2年制、現・霧島市立国分中央高校）に入る。卒業後、上京し、神奈川県私立・逗子開成中学校に入学したが、「やんちゃで、校舎の2階から放尿して放校処分を受けたようだ」と遼は言う²¹。しかし、逗子開成学園の在学名簿（退学者も含め）に

¹⁵ 2005年8月4日、富吉陽子の自宅（霧島市国分）で取材

¹⁶ 2012年2月23日、新盛の自宅（鹿児島市上竜尾町）で取材

¹⁷ 前掲、浅沼稻次郎編『故富吉栄二 菊川忠雄両君党葬追悼録』p7、p8

¹⁸ 生年月日は「6月20日」とする書籍も複数あるが、始良郡郡山尋常小学校（当時）の卒業証書から採用する。長男・栄蔵は1929年、35歳で死亡。職業軍人だったらしい。

¹⁹ 2005年8月4日、富吉陽子の自宅（霧島市国分）で取材

²⁰ 医療情報科学研究所編『病気がみえる vol.6 免疫・膠原病・感染症』（メディック・メディア 2009）によると、現在は若年性突発性関節炎と呼び、「骨の成長障害をきたすことがある」と記されている（64p）

²¹ 2010年9月23日、富吉遼の自宅（霧島市隼人町）で取材

は富吉の名は残っておらず、確認はできない²²。当時、富吉は逗子開成中近くの横須賀海軍工廠でアルバイトをしていて、工廠の経理部員だった藤田武雄²³にかわいがってもらったらしい。その縁で、戦後、藤田が社長になった大成建設に遼は入社したという。

その後、富吉は東京・神田の研数学館（2年制）で学び、1920（大正9）年に卒業する²⁴。「そのころはまだ作家志望で、バイオリンなどもひいた。むしろプチブル的な青年だったようである。しかし、この東京時代、大杉栄、大山郁夫らを知ったことで大きく変身する。いわばその無産運動への傾斜は、文学から入ったものといってよいだろう」と『不屈の系譜』²⁵は紹介する（422p）。同著によると、富吉は「作品を朝日新聞などに送ったが、なかなか入選しなかったこともあって、文学への志を捨てて帰郷」（同p）したようだ。研数学館卒業から2年後の1922（大正11）年、母校の精華学校で教壇に立つ²⁶。

富吉の長男・遼によると、富吉は数学の教師だった²⁷が、授業中に社会主義思想の話もしょっちゅうしたため、創設者で校長だった窪田二郎の怒りを買う。校名を教育勅語の「是レ我が国体ノ精華ニシテ」からとっていたぐらい、窪田は「国体」を大事にしていた²⁸。富吉は2年ほどで辞職させられたようだ。

国分・始良地方は小作農が多かった。当時、自作農は2割前後で、あとは自・小作か小作農だった²⁹。小作料も7割を超えていた地区もあった³⁰。このため保守的な鹿児島県では珍しく、小作争議も頻発する。富吉は小作農の団結を訴えて回った。「生タッボン（薪）は1本じゃ燃えん」が口癖だった³¹。

²² 逗子開成学園の事務局調べ（2022年1月25日）。荒垣秀雄『戦後人物論』（八雲出版、1948）には「学校は開成中学」（p185）とあるが、富吉の学歴に触れた他の書籍、新聞記事に「逗子開成中学校」は出てこない。逗子開成中に入る前の精華学校（現・霧島市立国分中央高校）、逗子開成中の後の研数学館も戦前の学籍簿はなく、確認できなかったが、両校については多くの書籍、新聞などで紹介されている。

²³ 社史発刊準備委員会編『大成建設社史』（大成建設 1963）によると、藤田は1914年、東京高等工業学校を卒業後、横須賀海軍経理部に。大成建設の前身・大倉土木には1925年に入社している。江戸末期、水戸藩の儒学者・藤田東湖の孫（p416）

²⁴ 第20回国会衆議院本会議、尾崎末吉議員による追悼演説（1954年11月30日）から

²⁵ 鹿児島新報社が同じタイトルで紙面連載した鹿児島出身者らの小伝を出版（1975）

²⁶ 『鹿児島新聞』1927年9月28日付、県議選当選者略歴から

²⁷ 2005年6月29日、富吉遼の自宅（霧島市隼人町）で取材

²⁸ 鹿児島新報社『青春有情 第四巻』（鹿児島新報社、1978）p87

²⁹ 国分郷土誌編纂委員会『国分郷土誌 上巻』（国分市、1998）p666

³⁰ 南日本新聞社編『鹿児島百年（下）大正・昭和編』（春苑堂書店、1968）p235

³¹ 松永明敏「いまなお語り継がれる「社会党の富吉」」（『月刊社会党』1994年4月号、日本社会党中央本部機関紙局）p164

竹の棒で手作りした秤を持ち歩いたようだ。小作農たちを前に、秤の一方にゆで卵、もう一方は卵の殻を載せて、釣り合うように殻の側は棒を上から押さえる。時々、離すと秤は跳ねる。ゆで卵は地主側。殻は小作農側だ。「こっちは地主どんで、こっちはおはんたっ 殻ばかり貰ろちよつで、いけんしてんピョコンピョコン跳ぬっ。半分半分なら、良かもんでん買うたり、食うたい出来っごなっ」³²。収穫の取り分を地主と小作で半々にすれば、いい買い物も食事もできる。富吉は視覚にも訴えて、農民たちの決意を促した。

「豊葦原の千五百秋（ちいほあき）の瑞穂の国の、おのが手作りの米が食えんとは何たるこつごわすか」と怒り、「伯爵、子爵、男爵よりも国を興すは肥えのシャク」と農家の誇りにも訴えた³³。

24（大正13）年11月、浜田仁左衛門とともに始良郡小作組合連合会を結成し、日本農民組合に加盟した。県内の農民運動組織化のさきがけだった。浜田は富吉より22歳上で、同志社時代、昵懇となった山川均とともに退学処分を受け、国分に帰り、農民運動を展開していた。組合設立の会場となった国分の劇場には200人余りが集まったようだ³⁴

組合は早速、東襲山（ひがしそのやま）、清水、国分の3ヵ村連合の小作争議を支援する。裁判闘争となるが、埒があかず、24年末に施行されたばかりの小作調停法を県内で初めて活用。28（昭和3年）にようよう小作料4割減で調停が成立する³⁵。争議中、富吉は暴力行為の疑いで検挙もされる³⁶が、闘争を主導した。「口八丁、手八丁」の富吉は法律活用という「手」にも長けていた。

この間、地元の女性・迫田ツ子（つね）を見初めて結婚する。2歳下だったが、身長は150センチ余り。富吉よりちょっと高かったようだ。「5尺足らず4尺なりの小男。こんな私が投獄4回、検束33回と言ったら皆さん笑うでしょう」。戦後、富吉がよく口にしたフレーズを遼は覚えている。当局ににらまれながら富吉は政治家への道を歩んでいく。

3 度重なる弾圧 「投獄4回、検束33回」

1925（大正14）年、普通選挙法が公布されて25歳以上の男性に選挙権が与えられて最初の鹿児島県議会議員選挙が27（昭和2）年9月、実施された。富吉は、前年結成された労働農民党（労農党）の鹿児島支部長として出馬。定数4に9人が争う始良郡区を3位で最年少当選を果たす。29歳だった。

³² 富吉の農民に対する口上は複数の書籍で紹介されている。本文は、川崎兼孝、久米雅章、松永明敏、鹿児島県歴史教育者協議会始良・伊佐地区サークル『鹿児島近代社会運動史』（南方新社、2005）p265を参考にした。

³³ 鹿児島新報社『不屈の系譜』（鹿児島新報社、1975）p421

³⁴ 前掲、南日本新聞社編『鹿児島百年（下）』p233～234

³⁵ 前掲、松永明敏「いまなお語り継がれる「社会党の富吉」」p163、農民運動史研究会編『日本農民運動史』（東洋経済新報社、1961）p215

³⁶ 前掲、農民運動史研究会編『日本農民運動史』、p215

同年11月、鹿児島市のボンタンアメ工場で賃上げと職場改善を求める労働争議が起こった。富吉は県議会で「労働環境の改善を求めているだけなのに」と警察の介入を批判した。争議は15日間続き、16人が解雇されて終結する³⁷。

富吉は県議のまま、30（昭和5）年2月の第17回衆議院選挙鹿児島2区（定数4）に労働党から初挑戦し、落選する。2区トップ当選は民政党から出馬した改造社社長の山本実彦だった。選挙期間中、富吉への警察の監視は厳しかったようだ。「弁士中止」の介入も度々だった。富吉は「こういうむさ苦しいところに警察官までわざわざおいでを願いましたことは光栄の至りであります」と聴衆の笑いをとったという³⁸。

31（昭和6）年6月、国分の東襲山（ひがしそのやま）村で起こった小作争議は激しかった。警察は53人の農民組合員を検挙する³⁹。早速、富吉は県警本部を訪れ、「民事の問題だ。農繁期ゆえ直ちに釈放を」と抗議した⁴⁰。

鹿児島地裁は現職県議である富吉を「暴力行為の教唆」の疑いで検挙する⁴¹。9月の県議会議員選挙で2期目の当選がかなわなかったのは事件の影響もあっただろう。鹿児島地裁は懲役5月の判決を下すが、長崎控訴院は逆転無罪を言い渡し確定。これを受け、富吉は国家補償法（32年施行）を活用し、38日間勾留された分の刑事補償金を請求し、勝ち取っている。県内初の活用だった⁴²。

ルールに基づいて主張すべきは主張し、活用する。富吉らしい。戦後、うたい文句にした「投獄4回、検束33回」の経験ゆえの雑草根性だったろう。

32（昭和7）年、日本は満州事変から拡大侵略した中国北東部を満州国として建国させる。軍部の独断専行を苦々しく思っていた犬養毅首相は、5・15事件で射殺され、政党政治の終焉を迎える。そうしたなか、無産政党として社会大衆党が7月、結束され、富吉は同党の鹿児島県連会長に就任する⁴³。

この年10月、富吉はまたも暴力行為等取締法違反で収監されたようだ。1審有罪で、控訴していたとみられる。明けて33（昭和8）年2月、鹿児島刑務所から保釈で出たところを特高警察官に拘束された。戦前は行政執行法で警察が令状なしで検束でき、その勾留が長く続くことも少なくなかった。

³⁷ 『鹿児島新聞』1927年12月8日付

³⁸ 前掲、南日本新聞社編『鹿児島百年（下）』p283

³⁹ 『鹿児島新聞』1931年6月10日付

⁴⁰ 『鹿児島新聞』1931年6月11日付

⁴¹ 『鹿児島新聞』1931年6月18日付

⁴² 前掲、南日本新聞社編『鹿児島百年（下）』p296

⁴³ 前掲、鹿児島新報社『不屈の系譜』p423

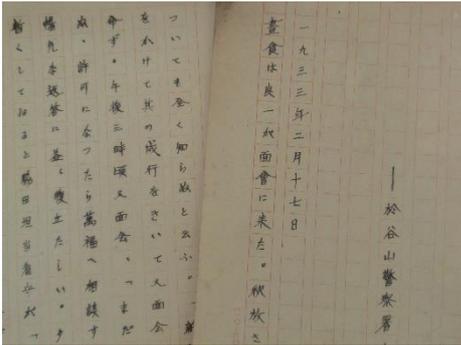


写真2 富吉の勾留中のメモ

谷山警察署に留置された富吉は、2ヶ月半にわたり日々様子をメモにして残していた=写真2。「予期した事ながら癩に障って仕方ない」と書く。ただ「署長や巡査部長が顔馴染みだったことはせめても気安さ」だったようだ。

留置場暮らしながら、ときには署員に雑誌を買いに行ってもらったり、一緒に食事したり、五目並べもしている。署長と2人して「猿股一つ」になり、裏庭で日光浴もした。

今回は「反戦の座談会や農民新聞の配布」から治安維持法違反の疑いを持たれての検束だったようで、県警特高課の警部が数日ごとにやってきて、取り調べした。追及はときに厳しかった。富吉は「相手を怒らせるのはオレの修養が足りぬ為めだ」「隠忍だ！沈黙だ！決して論争するな！」と自戒している。

警察署前の県道を、「献金」で購入された装甲車などの軍事パレードがあり、地元の小学生らが歓声を上げる。満州に向かうと聞いた富吉。「帝国主義日本のために蹂躪され虐殺される被圧迫民族は実に気の毒なものだ。資本主義は紳士の仮面を被る殺人鬼だ。正義だの、相互扶助だの、人道だの、愛だのと云うのは全て一切のカラクリを隠蔽するエキスキューズにすぎない」

留置場内。ときには理由なく涙が出た。「俺は去年の十月収監以来悲しいなんて思った事は一度だってありやしない。只憤怒でいつも一杯だ。それなのに涙が出るのはどうしたと云ふのだ？ 自分ながらわけがわからぬ」

いつ釈放されるのか。4月になると取り調べの特高警部が来ない日が続いたようだ。取り調べがないと、我が身の先も見通せない。「待ちわびたがとうゝ来ない」と記した夜、蚊が出た。「共産党にもは入りきれず、今更左翼轉向も出来ない。俺もとうゝ現実には打ち勝てずに無産階級運動から後退せねばならぬかなどと考へる」。珍しく弱気の富吉。共産党にも興味があったことを示す珍しい言質も披露している。

「あなたが釈放される夢を見ました」と2人の署員から言われた富吉は、雑誌『改造』5月号を買ってきてもらう。菊川忠雄の「現下労働組合運動の情勢」という論考を読んだらしい。「何てくだらぬ認識を欠いた有害無毒な文章だろうと思ふ」と書いている。後にその菊川と洞爺丸に乗船し、共に命を落とすことになる。

5月1日。「メーデーだ！ 晴れ渡った実に爽快なデモ日和だ」と、この日の富吉の筆致は元気だ。世界各地のデモの様子を想像し、「独裁官ヒットラーの白テロの下に行はれたるドイツの斗争は？」「中国ソヴェットを建設し、国内軍閥と国際帝国主義の重圧に抗する支那プロレタリア及農民は如何に戦つたろう。東京大阪はファシストの妨害、狂暴化する白テロの暴逆に抗して如何に戦はれたろう」と記す。そして、地元鹿児島に思いを寄せ、「嵐の後の無気味さにリーダーを奪はれ数ケ年の斗争の跡を顧みて組合員大衆は悲憤の涙を流してゐるだろう」と書いた。

この年の『特高月報5月分』（内務省警保局保安課、同年6月20日発行 復刻版）によると、全国48カ所でデモ行為、19カ所で演説会など開かれ、解散命令や検束などをうけているが、九州では福岡県の3カ所でデモ、演説会は長崎県と福岡県の各1カ所だけだった。鹿児島県では1923（大正12）年に初めて演説会が開かれているが、警察の摘発を受け、翌年以降、開催できないまま推移したようだ⁴⁴。

富吉のこの日の日記は続く。「メーデー歌を怒鳴って見る。喜びとも悲しみともしれぬ涙が浮ぶ。室内を掃除し、今夜から蚊帳を入れる」

深夜、小をたすのに2度目、宿直を起こすのをあきらめたこともあった。「土間のコンクリートの上に放射、音のしない様に陰茎をつまんで少しづつ出す気持の悪さ」。富吉は33歳。長女・陽子が5歳、長男・遼3歳、次女・黎子はまだよちよち歩きの1歳だった。夢に子どもたちが出たこともメモには記されていた。

4 国会議員活動・上 拳国一致・翼賛に夢抱く？

富吉栄二は1935（昭和10）年9月の鹿児島県議会議員選挙に、社会大衆党（社大党）公認で立候補し当選、県議に返り咲く。翌36年2月、第19回衆議院選挙に鹿児島2区から出馬し、初当選する。36歳。県内初の革新系代議士となった。

ただ衆議院議員選挙法違反（違法な文書配布）に問われ、12月に罰金刑が確定し、わずか10ヵ月で議員失格となってしまう。この間、佐賀県鳥栖の小学校で社大党の幹部だった浅沼稲次郎が講演した際、富吉は押し寄せた警察官から浅沼を守る。地元の農民組合の青年らに糞の付いた野良着を着けさせ、演壇の周りを固めた。警察官らはあまりの臭さに近づけなかったという。文字通りの便衣隊だった⁴⁵。

富吉の代議士復活のチャンスはすぐに回ってきた。37年、林銑十郎内閣が新年度予算成立後、衆議院を解散したため、第20回衆議院選挙が4月実施される。公民権停止は免れていた富吉は県内一番乗りで立候補を届け出、鹿児島2区（定数4）でトップ当選を果たす。

この選挙で社大党は37人が当選し、倍増の躍進を遂げる。民政党、政友会はそれぞれ170人以上当選し、まだ勢力を維持していたが、前年の2・26事件以降、軍部は一層、国政への影響力を強めていた。予備役の陸軍大将だった林首相は、国を挙げて一つにまとまって政治を行う「拳国一致」「大政翼賛」をうたいあげる談話を発表してまもなく退陣。その気運を引き受けた形で、国民の人気の高かった近衛文磨内閣が6月、登場する。

7月、中国で盧溝橋事件が勃発し、長い泥沼の日中戦争が始まる。社大党は党大会を開き、日本軍に対する慰問を決議。さらに「資本主義を打倒し、産業の計画化、国民生活の安定を期す」と党綱領を改正、近衛内閣の与党的な立場となる。

⁴⁴ 前掲、南日本新聞社編『鹿児島百年（下）』p233

⁴⁵ 南日本新聞社編『郷土人系 上』（春苑堂書店、1969）p174

翌 38 (昭和 13) 年、近衛内閣が電力の国営化を図る電力管理法案を提出すると、衆議院本会議、さらに委員会で、富吉は「革新政策の第一歩」と賛成の熱弁を振るった⁴⁶。続く、人的・物的資源を国家が統制できる国家総動員法案も社大党は支持する。

富吉は雑誌『政界往来』⁴⁷7月号に「政變漫談」として、当時の政界の様子を紹介している。国家統制の2つの法案成立を「現状維持の資本主義者たちに革新政策が心から喜ばれないのは無理もない」「今の場合、何人がやっても近衛内閣以上のことは出来ない」と評価。「最早、政友とか民政とか云ふご隠居の出る幕でない」と政党政治をリードしてきた両党を揶揄した。富吉は、当時の社大党同様、近衛内閣の国家主義に社会主義の幻影をみっていたのだろうか。

日中戦争の広がりには、「統一国家ではない支那はちょうど蜒(ゲジゲジ) 蚓(ミミズ) 見たいで」「北支五省を略されても」「上海を蹂躪されても」「南京を完全に占據されても、ピクリと息をしている」と記した。富吉のこの真意はどこにあったのか。5年前、谷山警察署に勾留されていたとき、誰に見せるわけでもなかったであろう手記には、日本軍に侵略された中国・満州について「帝国主義日本のために蹂躪され虐殺される被圧迫民族は実に気の毒だ」と書いた富吉だった。強権に圧せられながらも生きる中国の人々への思いはあったとみることもできる。

39 (昭和 15) 年、ヨーロッパで第 2 次世界大戦が勃発してまもない 10 月、富吉は日本の植民地・朝鮮半島の干ばつ状況を視察し、雑誌『大陸』⁴⁸ (40 年 1 月号) で報告している。京城の朝鮮児童の小学校 4、5 年生 139 人中 34 人が弁当を持参していなかった。「欠食児童の青ざめた、歪んだ顔は正視するに忍びない」。富吉はトイレで涙を拭いたという。「われもまた子をもつ親ぞ昼餉なき子らあまたあり涙わきくも」と詠んでいる。

米 1200 万石のうち 200 万石が日本へ渡り、朝鮮では 600 万石以上不足すると朝鮮の人々に同情を示した。と言っても、植民地を是とする立場。「今日を受難を克服し、平和と繁栄の中に皇国臣民たる歓喜を満喫する日の近からんことを心から祈る」と記した。

5 国会議員活動・下 大東亜共栄圏に夢抱く？

1940 (昭和 15) 年。日本では当初、皇紀 2600 年を記念して、東京オリンピックと万国博覧会が予定されていた。しかし、長引く日中戦争とヨーロッパでの第二次世界大戦の影響で中止に追い込まれた。2 月、衆議院で民政党の斎藤隆夫議員が、泥沼化した日中戦争の現実的な打開策を求めて、痛烈な政府批判演説を行う。「強者が弱者を征服する、これ

⁴⁶ 官報号外 衆議院議事速記録第三十六号 (1938 年 3 月 27) から

⁴⁷ 政界往来社が 1930 年に創刊した月刊誌。2011 年、誌面からウェブに切り替えた。

⁴⁸ 改造社が 1938 に創刊した、大陸進出の時局に呼応した大衆月刊誌。

が戦争である。正義が不正義を膺懲する、これが戦争という意味ではない」「聖戦の美名に隠れて、国民的犠牲を閑却」⁴⁹する余裕などない、と訴えた。

戦争の真理も突いた2時間に及ぶ大演説。議場からは拍手、野次の双方を浴びたようだが、軍が猛反発すると、各政党は色めき立ち、軍に同調する動きを見せる。3月、衆議院本会議は斎藤の議員除名を決議する。賛成296票、反対7票、棄権が144票。社会大衆党は除名賛成を決めていたが、10人が従わずに棄権に回った。このため社大党は、富吉栄二や西尾末広ら8人に離党を勧告する。8人は拒否したため除名された。

富吉も気骨のあるところを示した格好だったが、雑誌『大陸』4月号に寄せた国会報告では、斎藤の演説を「大部分は『事變處理』に関するものだった」と素っ気ない。「事變」とは盧溝橋事件に端を発した日中戦争のことだ。富吉は逆に斎藤が批判した日本の軍事戦略を支持し、「事變は（略）東亜新秩序建設と云ふ歴史的使命遂行上、避け難き宿命であった」「この際、政治経済全般に亘る革新を断行すべき」と強調した。

「革新」は、既成政党を解党し、挙国一致体制へという空気を生み出していた。いち早く社会大衆党は自ら解散し、時流に乗った第2次近衛文麿内閣が成立すると、政友会、民政党も解散に追いやられる。10月には近衛首相を総裁とする「大政翼賛会」が発足する。元々は近衛の私的諮問機関だったが、近衛に対する異常な人気と相まって一大政治組織のような存在となり⁵⁰、主だった旧政党が吸収された形となった。この直前、内閣はヨーロッパで攻勢をかけていたドイツ、イタリアと日独伊三国軍事同盟も結んだ。

明けて41（昭和16）年2月、近衛内閣は満期（4年）を迎えようとしていた衆議院議員の任期を1年間延長する。翼賛体制とするための衆議院選挙案がまとまらなかったためだったようだ⁵¹。

7月、日本軍が南部仏印（現・ベトナム）に進駐すると、アメリカは対日石油の輸出を全面的に停止するなど経済制裁を強化。対米戦争も辞さない空気のなか、10月、第3次近衛内閣に代わり、陸軍大将の東條英機が組閣する。外相には対米協調派の東郷茂徳（鹿児島県日置出身）が就任した。

これを知った富吉は「尊敬すべき唯一の郷土先輩」東郷に会いに行き、「平和主義者のあなたがなぜ外相に？」と詰問したらしい。そして12月8日、太平洋戦争が勃発。大本営発表を聞いた富吉は「万事休す。涙がとめどなく流れた」という。この逸話は富吉が戦後になって雑誌『政界往来』（54年11月号）に寄せたもので、文章には戦後の時代変化が影響しているかもしれない。

富吉は近衛のことは支持していたが、東條のことは嫌っていたかもしれないと筆者はみる。富吉は、日本の満州建国、さらには中国侵略での戦争までは「大東亜共栄」の夢を膨

⁴⁹ 国会図書館資料「史料にみる日本の近代」から「斎藤隆夫演説削除部分」

https://www.ndl.go.jp/modern/img_1/S029/S029-001l.html（2021年11月13日）

⁵⁰ 杉森久英『体制翼賛会前後』（文芸春秋、1988）p152～153

⁵¹ 吉見義明・横関至編『資料日本現代史5 翼賛選挙②』（大月書店、1981）p351

らませていたが、アメリカとの戦争は端から無謀と思っていた節がある。富吉には、アメリカ西海岸に移住し成功した親戚がいて、アメリカの国力は感じ取っていたようだった。長男の遼に「アメリカはスケールが大きい。そんな国と戦って勝てるわけがない」と話していたらしい⁵²。

明けて42（昭和17）年1月、富吉は衆議院の南方開発金庫法案委員会で質疑に立つ。同委員会会議録⁵³によると、富吉は日本軍が緒戦の勢いで占領したフィリピンやビルマ（現・ミャンマー）の独立を図る方針であることを評価したうえで、「日本側の主観的な建前を強要する」ことのないよう注意を促した。さらに、豊富な南洋資源は大東亜共栄圏建設に欠かせないが、カネで買っても現地はインフレを招くだけだ。現地の需要があるものを移出することが必要と説き、上海か香港かマニラに「自由通商地域」を、と提言もしている。

この質疑からは、富吉が、日本主導で東南・東アジア各国が多少なり自立する大東亜共栄圏構想に夢を抱いていた様子をもてとれる。

6 翼賛選挙・上 県を挙げての選挙妨害

太平洋戦争緒戦、シンガポールを攻略した1942（昭和17）年2月、国内では衆議院選挙に向け翼賛政治体制協議会が発足する。民間の政治結社の体をとったが、東條英機内閣肝いりの組織。「出たい人より出したい人を」をスローガンに、戦時体制の政府にとって都合のいい人物を推薦した。その数は衆議院の定数466人と同数で、選挙費用も1人5千円が渡された。臨時軍事費から出ていたとされる⁵⁴。

だれを推薦するかは警察の調査が元になったようだ。立候補予定者を「甲」「乙」「丙」の3ランクに分ける。「甲」は「時局に即応し、国策遂行の職務を完遂しうる人物」で、「乙」は「時局に順応し、国策を支持する人物」、「丙」は「時局認識が薄く、反国策・政府的言動をする不適當な人物」とされた。ただ、推薦候補には「乙」評価の人物も選ばれており、「丙」でも29人の現職代議士が推薦されたようだ⁵⁵。

鹿児島2区から出る現職の富吉栄二の評価は「丙」で、推薦されなかった⁵⁶。大東亜共栄圏構想に夢を託していた富吉の言動からは高評価を受けても良さそうだったが、警察は冷静に見ていた。富吉が属していた社会大衆党は結党以来、その解散時までずっと特高警察の監視対象で、内務省警保局保安課の『特高月報』にはほぼ毎月、その動静が報告されていた。富吉の当落予想は、警視庁情報課が作成したとみられる「衆議院議員調査票」で

⁵² 2005年6月29日、遼の自宅（霧島市隼人町）で取材

⁵³ 第79回帝国議会衆議院南方開発金庫法案委員会会議録第5号（昭和17年1月28日）

⁵⁴ 矢澤久純・清水聡『戦時司法の諸相』（溪水社、2011）p12

⁵⁵ 前掲、吉見義明・横関至編『資料 日本現代史5 翼賛選挙②』p359

⁵⁶ 前掲、矢澤久純・清水聡『戦時司法の諸相』p11、p62

「当」だったから⁵⁷、鹿児島県はなんとか富吉を落選させるべく陰に陽に富吉の選挙運動を妨害する。

県知事の薄田美朝（すすきだ・よしとも）は元々、警察官僚で満州国高官時代、関東軍参謀長だった東條の信望が厚かったらしい⁵⁸。県警察部の特高課を駆使して推薦候補の当選を図る。特高課長は原文兵衛（戦後、警視総監、参議院議長）だった。

4月4日、選挙が公示されると、富吉は選挙区内各地で講演会を開くが、ことごとく妨害に遭った。富吉らが選挙後に提出した選挙無効裁判の訴状や、警察官、大口町長、菱刈町長など14人を被疑者とした刑事告訴状には、その妨害ぶりを日時ともに具体的に記した別紙を付けてあった⁵⁹。よくぞここまで妨害事例を集めたものだ。特に刑事告訴では60件もの衆議院議員選挙法違反容疑の事案を列記していた。

その訴状と告訴状によると、富吉が各地で講演会を開こうとすると、各地の町長が同じ時間にその地区で臨時の常会（住民総会）を開いた。大口国民学校で開いたときは町長が町の公会堂で全町の臨時常会を招集、富吉の話に住民が聴くのを妨げたい。阿久根町大川国民学校の校長は5年生以上の児童を集めて「自由（非推薦）候補に入れたら非国民になると父兄に伝えなさい」と訓示し、「浜田尚友」と謄写した紙を持って帰らせたという。浜田は、国分の農民運動で富吉が指導を受けた浜田仁左衛門の長男。皮肉な巡り合わせだった。当時34歳で、富吉より10歳下の新人の推薦候補だった。東京日日新聞の元記者で、第二次近衛内閣の厚生大臣秘書官を辞めて出馬していた⁶⁰。

加治木町反土の常会では加治木警察署長が「推薦候補が落選したら町長は腹を切らねばならない」。清水村姫城の臨時常会では常会長が「富吉や下村が当選すれば戦争に負ける」と威嚇したらしい。下村栄二は弁護士で富吉同様、非推薦で立候補していた一人。選挙後、選挙妨害の実態を富吉とともに調査して回った。鹿児島2区（定数4）には、推薦候補4人のほか、非推薦も6人が立候補していた。

4月29日、加治木中学校（旧制）であった天長節（昭和天皇の誕生日）の遙拜式では、校長が「推薦候補の浜田、原口⁶¹両氏は本校の卒業生。ぜひ当選せしめねばならぬ。諸君の父兄にもよく注意せよ」と訓示したという。その訓示を受けた生徒の中には富吉の長男・遼もいた。

⁵⁷ 前掲、矢澤久純・清水聡『戦時司法の諸相』p63

⁵⁸ 前掲、南日本新聞社編『郷土人系 上』p141

⁵⁹ 前掲、吉見義明・横関至編『資料 日本現代史5 翼賛選挙②』に、選挙無効を訴える訴状、刑事告訴状ともに収録されている。

⁶⁰ 前掲、南日本新聞社『郷土人系 上』p163

⁶¹ 原口純允（すみちか）。満州や中国で電力事業を行っていたが、薄田知事から出馬を要請されて帰国した（前掲『郷土人系 上』p163）

翌 30 日は投票日。地元紙『鹿児島日報』は 1 面トップで「示せ！ 翼賛の赤誠」と報じる＝写真 3。薄田知事も「奉公の赤誠示せ」と談話を発表した。同告訴状によると、隼人町役場の投票場では国分警察署浜之市駐在の巡査が入場者に「サンズイ（浜田）を書きさえすれば問題ない」と干渉したらしい。

戦前の選挙の開票作業は時間がかかった。自宅に電話のなかった富吉は次女の黎子（当時 10 歳）に隣の医院の電話にかかってくる票数をメモに取らせた。「どうせ負ける選挙。恥ずかしかった」と黎子（1932 年 1 月生）は振り返る⁶²。

5 月 2 日、選挙結果が判明する。鹿児島 2 区は新人の浜田が 2 万 5 千票余りとしてトップ当選。前回、トップ当選の富吉は 2 千 6 百票余りしか獲得できず落選した。鹿児島県では 3 選挙区 12 議席のすべてを推薦候補が勝ち取った。1 区では 2 期目を目指した小泉純也（純一郎の父親）も当選した。戦後、自民党の重鎮となる二階堂進（3 区から非推薦で出馬）は「アメリカ帰りのスパイ」と揶揄されるなどして落選した⁶³。

富吉の長男・遼によると、選挙期間を通じて妨害を受け続けてきた富吉は、当選は半ば諦めていたが、いざ選挙結果を目の当たりにすると怒りが湧いてきたようだ。「こげなバカな選挙があるか！」。ともに落選した下村栄二らとともに妨害の実態を確認すべく、住民などに聴き取り調査を始める。国に楯突く行為。親戚などは迷惑がったようだが、富吉はひるまなかつた⁶⁴。



写真 3 『鹿児島日報』1942 年 4 月 30 日付

7 翼賛選挙・中 「欲算」の「トリック選挙」

全国では推薦候補が 466 人中 381 人当選した。当選率は 81・8%で、当局の予想を超える結果だったとされる。非推薦からは 603 人中 85 人が当選する。反軍演説で議員除名された斎藤隆夫は復活を果たし、芦田均や富吉の師・西尾末広も非推薦ながら議席を固守した。

行政のみならず新聞、ラジオも翼賛選挙を盛り上げた結果、投票率は全国平均で 83・1%と前回より 10 ポイント近くも高かった。鹿児島県はさらに高く県平均 84・4%。激戦区とされた富吉の鹿児島 2 区は 88・2%にまで達した。

しかし、白々しい思いで投票した人も少なからずいた。司法省刑事局が選挙翌月の 1942（昭和 17）年 5 月に「無効投票を通じて見たる国民思想の動向」という報告書をまとめて

⁶² 2010 年 9 月 19 日、富吉黎子の自宅（霧島市国分 姉の陽子と同居）で取材

⁶³ 上城恒夫『かごしま人物叢書④ 二階堂進』（高城書房、2006）p95

⁶⁴ 2010 年 9 月 23 日、富吉遼の自宅（霧島市隼人町）で取材

いる⁶⁵。無効票は14万票余り、投票総数の1・2%あったが、なかには投票紙に立候補者名ではなく、自らの思いを書いた者も少なくなかったのだ。刑事局は「偽らざる民の声」の可能性もあるとみて資料にしたようだ。

「日本最初のトリック選挙」とメモされた票があった。「インテリハ口に翼賛、心ハ欲算」「翼賛会ハ国賊ニシテ且ツ憲法ノ大敵ダ」「警察ハ推薦候補ノ運動員ナリ」など言い得て妙だ。「現在軍人が首相デイル限り選挙ノ必要ナシ」「欲賛会」「翼賛共産党」といったのもあった。

華々しい戦果が報じられていた太平洋戦争緒戦の当時だったが、「南進シテ戦果ハ拳ツテモ泣クハ国民バカリナリ」「一将功成ツテ万骨枯ル」「軍政をたほせ戦争を止めろ」。「敗戦日本」という票もあった。

「銃後を餓死せしめて戦に勝てるか馬鹿野郎」「腹が減つたあー腹が減つた米があー腹が減つた米だ」「此一票より米一俵」「人間ガソリン不足代用品よろしい」など、早くも配給生活の苦しさを訴える票も多かった。

富吉の訴えは、こうした声なき声の代弁でもあった。鹿児島2区で同じく落選した下村栄二ら3人とともに5月末、選挙の無効を求めて大審院に提訴する。戦前、選挙無効の訴えは1審制だった。同様の訴えは鹿児島1区、3区、さらに長崎1区、福島2区、三重1区からも起こされた。

6月5日、ミッドウェー海戦があり、日本国内では「大戦果」が報じられた。実際は日本海軍の大敗北。これ以降、日本は負け戦を続けることになるが、多くの国民はまだ「皇軍の強さ」を信じていた。

翌7月、富吉は刑事事件としても町長などを被疑者として加治木区裁判所検事局に告訴する。しかし、結果は不起訴。検察に捜査する気はなかったのだろう。

選挙無効を訴えた行政訴訟は違った。鹿児島2区を担当する大審院第3民事部（吉田久裁判長以下5人）は、鹿児島での出張・証人尋問を本格的に実施することを決める。この間、東條英機首相は、衆議院本会議や予算委員会で翼賛選挙の違法性を問われても「選挙妨害の事実は知らない」「戦時下、必要な翼賛体制」などと問題にしなかった⁶⁶。貴族院の予算委員会では「鹿児島県、これはよほどひどかったらしい」と指摘する議員もいた⁶⁷。

県を挙げて選挙妨害したその地に向かう吉田裁判長は出発前、覚悟を決め、遺言状を書いて妻に渡している。同行の一人、沖永良部・和泊出身の松尾実友判事も気骨のある人物だった。出張直前、法律専門紙の裁判官同士の座談会で「裁判官が時局に忠実な態度」をとることに警鐘を鳴らしていた⁶⁸。

⁶⁵ 前掲、吉見義明・横関至編『資料日本現代史5 翼賛選挙②』に収録。p 225～239

⁶⁶ 同『資料日本現代史5 翼賛選挙②』p145、p 146

⁶⁷ 同『資料日本現代史5 翼賛選挙②』p 163

⁶⁸ 前掲、清永聡『気骨の判決』p 86

8 翼賛選挙・下 勝ち取った「選挙無効」

「自由で公平な選挙を妨害された」という富吉栄二らの訴えを受けた大審院第3民事部（吉田久裁判長以下5人）は提訴から10ヵ月後の1943（昭和18）年3月下旬、鹿児島まで出張する。半月ほどかけて、200人近い証人を調べたようだ⁶⁹。

富吉たちは提訴の段階で、だれがどのような選挙妨害をいつどこで行ったのか具体的な事実を列挙した資料も提出していた。証人尋問は鹿児島地裁で5カ所に分かれて同時に行うという一大作業となった⁷⁰。

裁判所からの召喚に躊躇する証人も少なからずいて、富吉が説得して回ったらしい⁷¹。富吉らしく、日八丁手八丁で「おはんは出らんといかんど」とか「出てくんやん」などと脅したり懇願したりしたことだろう。尋問に立ち会う地元の弁護士の確保にも苦労したと富吉は述懐している⁷²。「知事、警察部長、警察署長、県会議長、町村長など翼政会、翼賛会、翼賛壮年団幹部等々県下のお歴々を調べるので後難を恐れてか控室で遊んでいても立ち会ってくれる人はいなかった」という。

吉田裁判長らは、立候補者を推薦し、選挙資金も出していた翼賛政治体制協議会の鹿児島県支部長だった坂口壮介県議会議長、さらには大政翼賛会県支部長の薄田美朝知事も呼び出して尋問した。薄田は知事兼任の県教育会長名で県内の各学校長に推薦候補への支援を要請する書面を出していた。証人尋問で問い質された薄田は「副会長が勝手に名前を使ったようだ」などと関与を否定した⁷³が、吉田裁判長らの心証は得られなかったようだ。吉田は「全部、原告の主張事実が立証された」と戦後、述べている⁷⁴。大がかりな証人尋問が終わった翌4月、薄田知事は警視總監に任命される。偶然かもしれないが、そのころから吉田は特高警察の尾行を受けるようになっていたらしい⁷⁵。

前年のミッドウェー海戦以降、苦戦を強いられた日本はこの43（昭和18）年になると、ガダルカナル島ですさまじい戦死・餓死者を出して撤退。アッツ島も守備隊が全滅する。兵士を補充するため植民地・朝鮮にも徴兵令が敷かれた。

⁶⁹ テレビ東京編『証言・私の昭和史3 太平洋戦争前期』（文芸春秋、1989）p337

⁷⁰ 同p337

⁷¹ 前掲、清水聡『気骨の判決』p92

⁷² 富吉栄二「市ヶ谷軍事法廷」、『政界往来』1954年11月号（政界往来社）p125

⁷³ 前掲、清水聡『気骨の判決』p98～p101

⁷⁴ 前掲、テレビ東京編『証言・私の昭和史3』p338

⁷⁵ 前掲、清水聡『気骨の判決』p115

東條内閣は国会議員に対する懲罰的な召集も行った。翼賛選挙で鹿児島2区から当選した浜田尚久もその一人だった。地方権限を縮小させる市制・町村制の改正に反対して東條の怒りを買ったらしい⁷⁶。2等兵として硫黄島に飛ばされる⁷⁷。

富吉の長男・遼によると、浜田は10月、応召の日、国分から鹿児島に向かう列車の中で偶然、富吉と会ったらしい⁷⁸。翼賛選挙に敗れた富吉は母校・精華学校の先輩で同郷の高木時吉が創設した金融機関・鹿児島無尽（現・南日本銀行）に迎えられており、その出勤途上だったのだろう、と遼。

浜田は「富吉さあは寸法が足りなくて行きゃならんね」と言っただけらしい。富吉にとって決して触れてもらいたくない問題だった。身長150センチ足らずの富吉の徴兵検査は、翼賛選挙時に評定されたのと同じ「丙」、「丙種」合格だった。このときの浜田には、どこにぶつけようもない怒りがあったのだろう、と筆者は推察する。無然とした富吉は思わず、浜田の子供について悪態をついたという。「2人は列車が鹿児島に着くまで口を開かなかったそうです」と、遼は当時、富吉から聞いた話を鮮明に覚えていた。

同じ10月、長崎1区と福島2区の選挙無効訴訟を担当していた大審院第2民事部は「官公吏の選挙干渉は選挙が無効になるほどの違反ではない」と訴え棄却の判決を出す⁷⁹。

明けて44（昭和19）年7月、サイパンの守備隊が全滅し、東條内閣は総辞職し、小磯国昭内閣が発足。12月、浜田は幸いにも硫黄島から召集解除され、衆議院に復帰し、議長から歓迎の弁を受けた⁸⁰。

翌45（昭和20）年。硫黄島に米軍が上陸して悲惨な戦闘が繰り返されていた3月1日、大審院第3民事部はついに判決を出す。「聖戦目的達成のための重要な選挙で、重責に耐える適材を選出すべきだったのに、その精神を滅却し甚だ遺憾の極み」と、富吉らの訴状にあった言葉をそのまま引用し、鹿児島県など行政の選挙妨害を認定。「選挙は無効」と決したのだった⁸¹。政治的な圧力に屈せず、司法の独立を全うした金字塔と言える。戦前戦後を通じて「選挙無効」が確定した例はこの判決以外にない。鹿児島1区、3区、さらに三重1区を審理していた大審院第1、第4民事部はそれぞれ訴えを退けたようだが、裁判記録が残っていない⁸²。

⁷⁶ 前田英昭「国家議員の二つの応召義務」、『駒澤大学政治学論集 52』（駒澤大学、2000）p61

⁷⁷ 前掲、国分郷土誌編纂委員会『国分郷土誌 上巻』p761

⁷⁸ 2016年8月4日、遼の自宅（霧島市隼人町）で取材

⁷⁹ 前掲、清水聡『気骨の判決』p119～120

⁸⁰ 前掲、矢澤久純・清永聡『戦時司法の諸相』p179、p185

⁸¹ 前掲、吉見義明・横関至編『資料日本現代史 5』p183

⁸² 前掲、矢澤久純・清水聡『戦時司法の諸相』p82

鹿児島2区はやり直し選挙となった。3月10日の東京大空襲以降、米軍の空襲を恐れ、「本土決戦」が叫ばれるなか、富吉は出馬を決意する。富吉の長男・遼によると、親戚などから「どうせ負ける」「出ない方がいい」と言われるが、「出らんければ、ひっかっぶい（小心者）と言われるっが」と立候補を一番に届け出た。9人が出馬し、うち推薦候補は3人。浜田は、今回は推薦されなかった。3月20日、午前中は空襲警報が発令されるなか投票が行われ、浜田を含め同じ顔ぶれの4人が当選する。富吉は次点に終わった。

4月下旬、国分地方は連日、空襲を受け、富吉家もやられた。清水村（現・霧島市国分）の実家に疎開していた富吉に、8月15日の敗戦後まもなく、片山哲から手紙が来たらしい。富吉の姪・小笠原京子にはその記憶がある。「そんなとこにいつまでもいないで、早く上京してこい、という内容だったですよ」⁸³



富吉の記念碑（霧島市国分）

9 芦田内閣 農相になれなかった悲運

1945（昭和20）年8月。敗戦直後、連合軍の占領下となったとはいえ、新生日本の政治に希望を燃やす人々は雨後の竹の子のように全国各地で動き始める。富吉は福岡の松本治一郎宅に身を寄せたようだ。富吉より一回り年上の松本は「部落解放の父」と呼ばれる一方、土建業で財をなしていた。農民運動、社会主義運動家たちが松本宅に集まり、新党づくりで議論を始めた⁸⁴。

東京では富吉の師・西尾末広らが活発に動き回り、11月、日本社会党が発足する。日比谷公会堂で開かれた結党大会には2千人以上が集まる。そのなかに富吉もいた⁸⁵。委員長は空席のまま書記長に片山哲、会計に松本。西尾は議会对策部長。組織部長に決まった浅沼稲次郎が開会の辞で、「ただ今より皇居に向かって遙拝します」と起立を促す。場内は一瞬、静まりかえる。半数以上の参加者が浅沼とともに皇居に向かって拝礼したらしい。「皇居遙拝とは何だ」と抗議の野次も飛んだという⁸⁶。

翌46（昭和21）年2月、富吉は社会党鹿児島県連を立ち上げ、委員長に就任。4月の第22回衆議院選挙に立候補する。女性にも参政権が与えられた初めての国政選挙。富吉の親族・宮田忠（元・隼人町教育長）によると、トラックの選挙カーに乗って地元の始良地区を中心に演説して回った。どこでも多くの人が集まったという。なかには富吉に野菜

⁸³ 2016年8月26日、小笠原京子の自宅（霧島市国分）で取材

⁸⁴ 高山文彦『水平記（下）』（新潮社、2007）p214

⁸⁵ 富吉栄二「市ヶ谷軍事法廷」、『政界往来』1954年11月号（政界往来社）p123

⁸⁶ 麻生良方『革命への挽歌』（講談社、1977）p70

やタケノコを手渡す人たちもいた。戦前の選挙の体験が身に染みていたのか、遠くから拝むように両手を合わせる姿もあったという⁸⁷。全県1区（定数11）で富吉は2位。通算3期目の当選を果たし、返り咲いた。

GHQ（連合国軍総司令部）の農地改革指令を受けて提出された自作農創設法案について、富吉は衆議院の質疑で「天来の福音」と歓迎する⁸⁸。小作農支援の農民運動から政治の世界に入っただけに感慨深いものがあっただろう。それでも、「土地に対する愛着は農民の断ち難き愛欲である」と、地主に1町歩残す点や農地委員会の委員構成などについては党の修正案を提出する⁸⁹。否決された。

明けて47（昭和22）年4月、第1次吉田茂内閣はGHQの求めに応じて、衆議院を解散。新憲法下での第1回参議院選挙と第23回衆議院選挙が4月、挙行される。鹿児島県は3区（合計定数10）に分かれ、富吉は2区（定数3）でトップ当選を果たした（通算4期目）。

社会党は参議院選、衆議院選とも比較第1党となる大躍進を果たし、党首の片山哲が首班指名を受けた。ただ第2党・自由党、第3党・民主党の保守2党との差はわずかだったことから民主党、国民協同党と3党連立の政権を組みことになった。

しかし、組閣は難航する。民主党の意向を受けて、社会党からの大臣7人は全員右派となり、6月、片山内閣が正式に発足する。大臣への期待も出ていた富吉は商工政務次官に就任。農林大臣は平野力三がなったが、戦前の右翼的な活動にGHQ民政局が難色を示し、就任わずか5ヵ月で罷免されてしまった。

後任をだれにするか。『読売新聞』（1947年12月12日付）は「農相に富吉氏きょう決定か」と報じるが、誤報となってしまふ。波多野鼎が就いた。

今度も自派から大臣を出せなかった社会党左派は党内野党のような観を呈する。翌48（昭和23）年2月、左派の鈴木茂三郎が委員長だった予算委員会は政府の追加予算案を強硬な措置で否決した。そのまま片山内閣は総辞職に追い込まれる。本予算を一度も組めないまま、わずか8ヵ月の短命内閣となってしまった。

代わって登場したのが芦田内閣だった。同じ3党連立で、今度は民主党総裁の芦田均を首相に組閣が始まるが、これまた難航し半月かかってしまふ。3月、ようやく成立した。

組閣難産の原因の一つは、富吉が渴望していた農相のポストだった。内閣成立直前、共同通信は「農林大臣、富吉」で配信する⁹⁰。このとき芦田は、富吉か連立を組む国協党党首の三木武夫を考えていたようだ⁹¹。

⁸⁷ 宮田の祖母と富吉の母が姉妹。2005年6月20日、宮田の自宅（霧島市隼人町）で取材

⁸⁸ 第90回帝国議会衆議院、自作農創設特別措置法案外一件会議録第9回（1946年23日）から。

⁸⁹ 官報号外、同議事速記録第52号（1946年10月6日）から。

⁹⁰ 『南日本新聞』1948年3月9日付

⁹¹ 芦田均『芦田均日記 第二巻』（岩波書店、1986）p69

それが翌日の3党首会談で一転する。社会党の片山が永江一夫を推してきたのだ。これを芦田は「Good News」と歓迎する⁹²。農協組合法が前年にできて、全国各地で農協設立の動きが高まっているなか、その支配を巡り右派的な「全農」（全国農民組合）派と左派的な「日農」（日本農民組合）派が対立していた。

大正末期から鹿児島で農民組合運動に励んできた富吉は「日農」系とされていた。その富吉の農相就任には平野をリーダーとする「全農」派議員らが反発を示していた。対立に縁のない永江は無難な選択だったようだ。連立政権の安定を狙った芦田も自ら農相になるつもりでもあった三木も受け入れた⁹³。

富吉がようやく座ろうとしていた農林大臣のイスが直前で外されてしまった。代わりに与えられたのは逓信大臣のイスだった。このとき富吉、50歳。鹿児島選出の国会議員で戦後、初めての大臣の誕生だった。が、荷の重いポストだったろう。

10 「下宿大臣」 労働争議、治める役回りに

1948（昭和23）年3月、芦田均連立内閣で富吉は念願の農相ではなく、逓信相に任命された。「各党から軽視されたポスト。イスの配給の残り物をもらった観」と朝日新聞論説委員の荒垣秀雄は『戦後人文論』（八雲出版、1948）で評した（p185）。ただ労働争議が激しかったことを考えれば、「労働相、運輸相とともに重要ポスト」だったと荒垣。



写真4 芦田内閣組閣後の記念写真。左端が富吉

組閣後の記念写真では向かって左端に小さく写る＝写真4。カメラマンからは「富吉さん、背伸びしてください」と声がかかった⁹⁴。身長、約150センチ。共同通信記者は「背伸びして振り返る富吉さん」と記した⁹⁵。富吉は基本、前向きだ。負けん気も強い。

富吉が所管することになった逓信省は、郵便、電報・電話など多くの現場労働者を抱えており、その組合・全逓

信労働組合（全逓）の活動は活発だった。賃上げを求めて全国各地でストが実施され、国民生活にも影響が出ていた。「全逓三月闘争」だ。

⁹² 前掲、芦田均『芦田均日記 第二巻』p71

⁹³ 『朝日新聞』1948年3月10日付

⁹⁴ 『朝日新聞』1948年3月11日付

⁹⁵ 『南日本新聞』同日付

その対応が務めとなった富吉自身、労働者のような暮らしをしていた。大臣官邸には入居せず、東京・芝のビル3階の6畳間にトランク1個にボストンバッグ1個を置いただけの「耐乏見本生活」だった⁹⁶。

ビルの大家は片山哲の秘書で、元々、西尾末広が借りていた部屋だった。戦後、鹿児島から上京してきた富吉が居候し、前年、西尾は引っ越していた⁹⁷。お風呂は銭湯通いだったが、国会の大臣席で落ち着かない様子だった富吉が裏に引っ込んで禪一枚になったところ、シャツから大きなシラミが出てきたという逸話もある⁹⁸。「下宿大臣」「6畳間大臣」「銭湯大臣」などとあだ名が付いた。

富吉は逄相就任早々に南日本新聞の取材を受け、全逄闘争について「わしも青年時代から労働運動をやり4回も投獄された。労働者の気持はよくわかる。特に官業労務者がみじめなことは知り尽くしている」と理解を示す一方で、「耐え忍ぶことは忘れてはならぬ」と語った⁹⁹。

その後の記者会見でも、ストで国民が迷惑していることについて「仕方がない」。一方で、「破壊を目的としたスト行動に対してはじっくり話し合い、できるだけ被害を食い止めねばならぬ」と覚悟を示した。そして、「今の労働運動の指導者は丹頂鶴だ。頭が赤く体は白い」とも語っている¹⁰⁰。

富吉は共産党を嫌っていた節がある。社会党右派とされる由縁でもあるだろう。このころ教員だった親族の宮田忠に、「組合活動をしろ」と命じ、その理由を「今のままの活動では日本は共産主義になる。それじゃいかん」と語っていたという¹⁰¹。奄美群島が日本復帰してまもない1954年2月、徳之島を訪れた際は、地元紙『南西日報』の小林正秀（同紙の編集印刷発行人）に、「共産党は共産化するために手段を選ばない。だから共産党の武力革命を抑えるだけの国内治安防衛が必要だ」と話している¹⁰²。

逄相大臣・富吉は、記者会見の2日後、全逄の幹部らとも1時間余り会見したが、話は平行線のまま。詰め寄る幹部らに最後は「おれの気持ちはこの歌でわかるよ」と短歌を2首披露したという。その1首が「きくもよしきかぬともよし我はただ従業員のためにつくさん」。全逄幹部らはぼかんとした表情だったらしい。『南日本新聞』（1948年3月18日付）は、そのように会見の様子を伝え、「労組代表を煙に巻く」と見出しを付けた。

⁹⁶ 『読売新聞』1948年3月11日付

⁹⁷ 『南日本新聞』同日付

⁹⁸ 『南日本新聞』1948年3月28日付

⁹⁹ 『南日本新聞』1948年3月11日付

¹⁰⁰ 『南日本新聞』1948年3月17日付

¹⁰¹ 2005年6月20日、宮田の自宅（霧島市隼人町）で取材

¹⁰² 『南西日報』1954年2月2日付 当時論議されていた日本の再軍備には社会党として反対するが、国内治安は大事という話から富吉が語ったようだ。

全通は3月末に全国一斉のストを予定し、その行方が注目された。が、直前になってGHQが乗り出し、「経済復興、公共利益に重大な不利益を及ぼす」とスト中止の覚書を富吉通相に出す。全通も矛を収めざるを得なかった。

7月、富吉は鹿児島に帰省する。鹿児島にとって戦後初の国務大臣の郷土入りに地元は沸いた。南日本新聞主催で鹿児島市で開いた講演会は超満員で、深夜、清水村（現・霧島市国分）の自宅に帰ると、付近住民でごった返したという¹⁰³。講演会の前には地元の全通代表とも面談し、激論になりながらも、最後は「スト大いにやるべし、ただし責任あるストをな」と締めたようだ¹⁰⁴。

労働運動は下火になることはなかった。芦田内閣退陣を求める政治運動にも発展していくなか、内閣はGHQのマッカーサー書簡を受け、7月末、公務員の団体交渉権、争議権を剥奪する政令を公布する¹⁰⁵。これを受け、富吉通相も全通従業員に対し訓示した。

「我々は敗戦国民として占領軍治下におかれていることを忘れてはならぬ」と自粛を求め、公務員の待遇改善を進めるとした。

富吉は南日本新聞社に寄せた所感では、「マッカーサー書簡の狙いは温存する官僚主義の排除にある」と評価を示す。公務員が「民主主義の根本理念である公僕精神を没却している」のが背景にあるというのだった。全通、国鉄労組が徹底的闘争を掲げていることについては、「これは一部の幹部で一般大衆は目下のところ静観的です」と記していた¹⁰⁶。

かつては鹿児島の農民運動・労働運動をリードしてきた富吉。治める立場になって、組合幹部への警戒感を示しながら、ジレンマを抱えていたようにみえる。

11 落選・返り咲き 党派を超えた「人間派」？

芦田内閣が公務員の団体交渉権、争議権を剥奪した政令を法制化するべく、国家公務員法の改正に取り組んでいた1948（昭和23）年後半、政界は昭電疑獄事件に追われていた。昭和電工社長が政府関連融資に関し官僚や政治家に賄賂を贈ったとされる疑惑。連立内閣の要だった西尾末広も逮捕されたことで、芦田首相は10月、総辞職を決める。片山内閣より短い7ヵ月足らずの命運だった。

¹⁰³ 『南日本新聞』1948年7月15日付、16日付

¹⁰⁴ 『南日本新聞』1948年7月15日付

¹⁰⁵ 4ヵ月後の1948年11月、第1次吉田内閣の下、国家公務員法改正で明文化した。地方公務員法も50年末、改正される。

¹⁰⁶ 『南日本新聞』1948年8月10日付

代わって、民主自由党（自由党と民主党脱党組が結成）の総裁・吉田茂が第2次吉田内閣を発足させるが、年末に内閣不信任案が可決され、吉田は衆議院を解散。翌49（昭和24）年1月、第24回衆議院議員選挙が実施された。

民主自由党が圧勝し、社会党は民主党とともに惨敗。党首の片山哲委員長ら幹部が次々落選し、富吉も当選できなかった。「ナーニ、社会党のヨカ薬…政治は長か」と、『アサヒグラフ』1949年2月16日号（朝日新聞社）の「落選元大臣」の特集で語っている＝写真5。

他に職はなかった富吉。この年4月、明治大学に入学して上京してきた長男・遼によると、富吉はしばらくして東京のタクシー会社から顧問として迎えられ



写真5 中央が富吉

る。社長が富吉を買ってくれていたようで、社員旅行には遼も一緒に参加したらしい。月給は3万円だったという¹⁰⁷。富吉が逡相になった48（昭和23）年の議員歳費はようよう上がって月1万8千円¹⁰⁸。大臣報酬は実質なかったようものだったらしいから¹⁰⁹、浪人時代の方が実入りはよくなったわけだ。50（昭和25）年ごろに東京・麻布に一軒家をもつことができた。

国会議員の宿舎はこのとき、既に整備されていたが、戦前はなかった。このため地方選出の衆議院議員は会期中（戦後より短かった）自力で宿を確保するしかなかった。富吉は福岡選出の社会党党友代議士だった松本治一郎の東京・赤坂の自宅兼会社に居候するなどしていたようだ¹¹⁰。富吉より一回り年上の松本は「部落解放の父」と呼ばれる一方、土建業で財をなして、富吉をかわいがっていた。洞爺丸遭難で富吉が死んだ知らせを受けると、「富吉を失った治一郎のころは、なかなか晴れなかった」という¹¹¹。

富吉は年上の功を成す、あるいは成した人物から好かれたようだ。「逗子開成中時代」は後に大成建設社長となる藤田武雄に。政治家となつてからは西尾末広が公私ともに面倒をみてくれた。そして、翼賛選挙に敗れた戦時中の浪人時代は2年近く、母校・精華学校

¹⁰⁷ 2010年、富吉遼の自宅（霧島市隼人町）で取材

¹⁰⁸ 国会議員の歳費、旅費及び手当等に関する法律の改正（1948年7月）で同額に。

¹⁰⁹ 『読売新聞』1948年3月20日付は大臣給与を「月額2500円」と紹介。同年12月に大臣などの給与体系が創設され月3万2千円になる（2004年3月31日「幹部公務員の給与に関する有識者懇談会」の資料から）

<https://www.kantei.go.jp/jp/singi/kyuyo/houkoku/040331houkoku.html>（2022年1月31日）

¹¹⁰ 前掲、高山文彦『水平記（下）』p199

¹¹¹ 同p385

の先輩で同郷の高木時吉が創設した鹿児島無尽（現・南日本銀行）に企画部長で迎えられていたことは前述した。

そんな富吉の戦後の浪人中、1949（昭和24）年から50（昭和25）年、東アジア情勢、国内情勢ともきな臭くなる。下山、三鷹、松川と国鉄労組に関わる怪事件が起こり、中国では内戦に共産党が勝利して中華人民共和国が成立。朝鮮半島では戦争が勃発し、日本では自衛隊の前身・警察予備隊が発足する。

社会主義と資本主義の東西対立が緊張を帯びるなか51（昭和26）年、日本は西側の一員として国際社会に復帰し、講和条約、そして日米安保条約に調印する。社会党内は講和の在り方と米軍駐留の問題で左派と右派が激しく対立し、ついに10月の臨時党大会で左右に分裂してしまう。

翌52（昭和27）年1月、鹿児島県連も激論の末、分裂。右派県連会長になった富吉は10月、第25回衆議院選挙で返り咲き、翌53（昭和28）年4月の第26回の選挙で6期目の当選を果たす。

社会党の統一は55（昭和30）年10月まで待たないといけませんが、54年、洞爺丸遭難で富吉が亡くなり、執り行われた党葬で左派委員長の鈴木茂三郎は「将来、両社¹¹²にとってまとめ役として君の重責は大きなものが期待されておりましたのに」と弔辞で述べている¹¹³。葬儀での修辞ではなく本音だったではなかろうか。革新系とは言え、富吉は理論派ではなかった。強いて言えば、党派を超えた「人間派」だった。

12 歌よみ人生 劣等感越え磊落に

鹿児島県初の革新系代議士だった富吉栄二は、理論で論じ合うというより正義・不正義、貧富の観点から主張するタイプだった。直情系の親分肌ながら、機知に富み、場を和ませる冗談を言う。多くの人に好かれた。戦前は幾度となく警察に勾留されたが、あるときは同房となったヤクザが「これは国分の大統領さあじゃござんせんか」と座を譲ってくれたという話もあるらしい¹¹⁴。

敗戦直後の1945（昭和20）年8月、翼賛選挙の再選挙にも敗れ、清水村（現・霧島市国分）の実家近くで竹の松葉杖などを手作りしているところへ、奄美の言論人で早稲田大学時代に共産党員となり非合法活動もした中村安太郎¹¹⁵が会いに来る。

日本の民主化については話が合ったが、天皇制の問題では「完全に相違した」と、中村は著書『祖国への道』（文理閣、1984年）で書いている（p30～31）。

¹¹² 社会党の右派と左派のこと。

¹¹³ 前掲、浅沼稻次郎編『故富吉栄二 菊川忠雄両君党葬追悼録』p24

¹¹⁴ 前掲、鹿児島新報社『不屈の系譜』p426

¹¹⁵ 米軍政下の奄美で、復帰運動や地元紙『奄美タイムス』の発刊に尽し、鹿児島県議会議員（共産党）も1期（1955～59年）

富吉は「天皇などというものは神棚に祭っておけばいいのだよ。さわらぬ神にたたりなしだよ、きみ」と笑顔。そこへ「農民運動時代の人たちが次々と」やってきた。「おお君も元気だったか」。富吉は「小柄な身体を、親分らしくおうように揺すぶって大きな笑い声をたてた」という。

中村は、「三二年テーゼ¹¹⁶の正しい意味を理解することは彼には無理だった」「半ば失望したが、半ば期待通りだったと合点して引きあげた」と冷ややかに記している。富吉らしさがわかるエピソードだ。

150センチに満たなかった背の低さ。大学出ではない学歴。富吉にとってコンプレックスでもあっただろうが、それを逆手にとる術を身につけていた。富吉を知る地元の人「日当山の侏儒殿（しゅじゅどん）の再来」と称したようだ。侏儒は江戸時代初期、日当山（現・霧島市隼人町）に住む島津家の鷹師から地頭となった人物。短身小柄で、巧妙軽快な語りと頓知に富んだ才能が島津の殿様にも愛されたという¹¹⁷。

富吉の「百姓出身で学はない」は口癖だった。「5尺に足らず4尺なりの小男が他人の頭を殴ることなどしません」。講演会場の演台が富吉の胸に当たるほどだと、「こいはオイの標準に合っちゃらん」と足台を持ってこさせた。「こいが標準じゃ」と会場の笑いをとった。取材時、86歳だった元衆議院議員・新盛辰雄は、大衆を前にした富吉の言動をよく覚えていた¹¹⁸。

富吉は、「みんな貧乏しておっじゃろ？（貧乏しているだろう）」という問いかけもよくしたという。「破れ襖っの家に住んじょ 旦那が内っ方（妻）を叩っ 内っ方は子どもを叩っ 子どもは猫を叩っ 猫は仕方なく襖を破っ こいで良かとか?」。人々に貧しさの悪循環を直視してほしいという思いだった。

「自由党は、ナスビの朝漬けごわんさあ。あげたときゃ色はよかどん、二時間もたつと、色は悪うなっし、においも悪か。社会党はツボ漬けごわんど。みたくは悪かどん、十日おいても味は変わらん」¹¹⁹

富吉の長女・陽子、長男・遼によると、若い頃は酒を飲んだが、ある晩、酔って帰宅して押し入れをトイレと間違っって小水して以来、酒は一切絶つたらしい。酔って相談に来る人には「シラの時にまた来てくれ」と追い返した。煙草は1日3箱吸っていたが、扁桃腺がよく腫れて、のど飴は切らさなかつたという。三味線をよく弾いていた母親ミツの影響か、富吉は戦前、宴会などでお座敷唄「白頭山節」を歌い、場を盛り上げたらしい¹²⁰。

¹¹⁶ 天皇制打倒のブルジョア民主主義革命の後、プロレタリア革命を起こすという二段階革命を唱えた共産党の綱領。1932年に発表された。

¹¹⁷ 国分郷土誌編纂委員会『国分郷土誌 下巻』（国分市、1998）p 796

¹¹⁸ 2012年2月23日、新盛の自宅（鹿児島市上竜尾町）で取材

¹¹⁹ 久保統一『人情親父ひげ議長 新川近義伝』（有馬純次、1979）p 138

¹²⁰ 富吉陽子は2010年8月4日、陽子の自宅（霧島市国分）で取材、富吉遼は2016年8月4日、遼の自宅（霧島市隼人町）で取材

アララギ派の歌人で、歌集も出したようだが、確認できていない。郵政省（1949年、逓信省が廃止になり発足）の機関誌『郵政』（月刊）には好んで歌を載せていた。「昨夜の雨に濡れたる畑に杓子菜の色さやかなり露をふふみて」「浅蜷煮る味噌汁の香の流れくる縁に坐りて朝刊を読む」¹²¹

「乏しきに耐へて生き来し五十年を顧みるさへ老いとやいはむ」¹²²。1954（昭和29）年9月、55歳での遭難死。まだまだ活躍したかっただろう。

雅号は「南風」を名乗った。富吉を兄と慕った新川近義（元鹿児島市議会議員）は建設業を営み、富吉の長女・陽子によると、戦後、空襲にやられたままだった富吉の国分（現・霧島市）の家を建て直してあげている¹²³。鹿児島市長田町で旅館「南風荘」の経営に乗り出し、富吉も利用した。46（昭和21）年2月、社会党鹿児島県連が発足した際、来賓として来鹿した片山哲書記長（当時）の歓迎会も南風荘で開かれた¹²⁴。

新川の半生をまとめた『人情ひげ議長 新川近義伝』には、「南風荘」の由来は出てこないが、富吉の雅号からとったのではないだろうか。現在の「南風病院」はこの旅館を購入して54年9月、開業している。その際、新川からのたつての希望が「南風という名前を残して」だったらしい。南風病院の創設者・川井田多喜は手記本『私のひとり言』（非売品、2005）にそう記している（p18）。富吉の遭難直前のことだが、新川の富吉への思慕が「南風」という言葉に託されたのかもしれない。

富吉は、小さい体ながら、周りの人々の前で人生を大きく磊落（らいらく）にうたう政治家だった。



『南日本新聞』

1948年4月19日付

¹²¹ 『郵政』1950年6月号に「春酣譜」と題して5首

¹¹⁸ 『逓信協会雑誌』1950年5月号に、「雑詠」と題して5首。

¹¹⁹ 2010年8月4日、霧島市国分の陽子の自宅で取材

¹²⁰ 前掲、久保統一『人情親父ひげ議長 新川近義伝』p139

<参考文献>

- 吉見義明・横関至編『資料 日本現代史 5 翼賛選挙②』（大月書店、1981）
- 矢澤久純・清永聡『戦時司法の諸相 翼賛選挙無効判決と司法権の独立』（溪水社、2011）
- 清永聡『気骨の判決 東條英機と闘った裁判官』（新潮社、2008）
- 飯塚繁太郎・宇治敏彦・羽原清雅『結党 40 年・日本社会党』（行政問題研究所出版局、1985）
- 南日本新聞社編『郷土人系 上』（春苑堂書店、1969）
- 南日本新聞社編『郷土人系 下』（春苑堂書店、1969）
- 南日本新聞社編（1968）『鹿児島百年（下）大正・昭和編』、春苑堂書店
- 南日本新聞社編『かごしま 20 世紀 山河こえて①』（南日本新聞社、2000）
- 川崎兼孝・久米雅章・松永昭敏・鹿児島県歴史教育者協議会始良伊佐地区サークル『鹿児島県近代社会運動史』（南方新社、2005）
- 芳即正・松永昭敏『権力に抗った薩摩人②』（南方新社、2010）
- 松永昭敏「いまなお語り継がれる「社会党の富吉」、『月刊社会党』1994 年 9 月号（日本社会党中央本部機関紙局、1994）
- 松原一枝『改造社と山本実彦』（南方新社、2000）
- 鹿児島新報社『不屈の系譜』（鹿児島新報社、1975）
- 鹿児島新報社『青春有情 第四巻』（鹿児島新報社、1978）
- 荒垣秀雄『戦後人物論』（八雲書店、1948）
- 浅沼稻次郎編『故富吉栄二 菊川忠雄両君党葬追悼録』（日本社会党本部、1954）
- 中村安太郎『祖国への道』（図書出版文理閣、1984）
- 上城恒夫『かごしま人物叢書④ 二階堂進 一清貧の政治家』（高城書房、2006）
- 久保統一『人情親父ひげ議長 新川近義伝』（有馬純次、1979）
- 川井田多喜『私のひとり言』（非売品、2005）
- 国分郷土誌編纂委員会『国分郷土誌 上巻』（国分市、1997）
- 国分郷土誌編纂委員会『国分郷土誌 下巻』（国分市、1998）
- 上前淳一郎『洞爺丸はなぜ沈んだか』（文藝春秋、1983）
- 井出孫六『ルポルタージュ 戦後史 上』（岩波書店、1991）
- 麻生良方『革命への挽歌』（講談社、1977）
- 西尾末広『大衆と共に』（世界社、1951）
- 芦田均『芦田均日記 第二巻』（岩波書店、1986）
- テレビ東京編『証言・私の昭和史 2』（文藝春秋、1989）
- テレビ東京編『証言・私の昭和史 3』（文藝春秋、1989）
- 高山文彦『水平記（下）』（新潮社、2007）
- 農民組合史刊行会編『農民組合運動史』（日刊農業新聞社、1960）
- 農民運動史研究会編『日本農民運動史』（東洋経済新報社、1961）

杉森久英『大政翼賛会前後』（文藝春秋、1988）

朝日新聞東京本社『アサヒグラフ』1949年2月16日号（朝日新聞社、1949）

内務省警保局保安課『特高月報 復刻版』昭和5年10月分から昭和10年9月分まで毎号
（政経出版社、1973）出版年は推定

内務省警保局保安課『特高外事月報 復刻版』昭和11年1月分から昭和13年7月分まで
毎号（政経出版社、1973）出版年は推定

内務省警保局保安課『特高月報 復刻版』昭和13年8月分から昭和19年11月分まで毎
号（政経出版社、1973）出版年は推定